



会員 菅原 悠互

「コロナ世代」の挑戦

1 はじめに

2020年の12月に新人弁護士として新規登録をしてから早くも半年が経とうとしている。自身の思い描く弁護士像に少しでも近づこうと、新しい環境の中で日々奮闘する中で、将来あるべき弁護士としての姿をあらためて考えることが多くなった。新人弁護士ならではの葛藤がそうさせているのかもしれないが、原因はどうも他にあるようだ。それは、我々73期がコロナ禍で法曹デビューをした初の世代であるということにあらう。この前代未聞の時代に法曹界の門を叩いた者の一人として、これまでの振り返りを交えつつ、今後の抱負を述べていきたいと思う。

2 石の上にも三年

修習時代にたいへん世話になった指導担当弁護士をはじめ、司法研修所の教官、そして配属部の裁判官から「石の上にも三年とはよくいったものである」という言葉をよく耳にした。当時は、ある程度業務を一人でこなせるようになるまでが三年、それまでは失敗や反省を繰り返しつつ、がむしゃらに突っ走るのが新人弁護士の使命である。ただ漠然とそう理解していたのだが、いざ実務に携わってみると、その言葉の重みをより一層痛感するようになった。

振り返ってみると、我々73期は二回試験こそ通常どおり行われたものの、集合修習は史上初のオンライン形式での実施となった他、実務修習の一部も隔日登庁や自宅学修となる等のイレギュラーを経験してきた。その流れは、実際に実務にでてからも同じく、ミーティングや打合せをオンラインで行う機会が多くなったこと、弁護士会の各種研修についても軒並みオンラインでの実施となったこと、そして何より食事や飲み会等の対面

でのコミュニケーションの機会が減少したことで、人との繋がりを築くことができにくい環境となった。

「石の上にも三年」というのは、とすれば、現在のコロナ禍が落ち着いて再び元の世界に戻るまでが三年ということなのかもしれない。ただ、いずれにせよこのようなイレギュラーな環境の中で、自分は運が悪かったのだと字義どおりに我慢を続けるのではなく、むしろ何か一つどんな些細なことであってもいいから、このような時代だからこそできること・すべきことを考える。今では、この難解な問題に対処していくことこそが、我々新人弁護士に課された最大の試練であり、最も重要な使命であると考えられるようになった。

3 コロナ世代として・・

本原稿の執筆は、修習時代にとてもよく面倒を見ていただいた修習幹事の先輩弁護士からお話をいただいたものであり、恥ずかしながら自身にとっては弁護士となってから初の執筆である。今も原稿を読み返しては、自身の拙い文章力を強く実感しているが、このような貴重な経験ができたことは新人弁護士としてたいへん光栄である。

数年後には、弁護士としての真価を問われる時が確実にやってくるであろう。その時までには自身の研鑽のみならず、今もオンライン修習を行っている74期以降の会員に「コロナ世代」ならではのありべき姿を示しながら実践していく。そのような形でリレーのバトンを繋いでいくことができたなら、自然と自身の思い描く弁護士像にも少しだけ近づくことができるのではないか。

コロナ世代の挑戦は既に始まっているのだということを実感しつつ、一歩ずつ着実に成長していく！

あらためて自分にそう言い聞かせた。